

JCLA2013 ワークショップ

『会話の中の文法と認知：相互行為言語学のアプローチ』

1. はじめに

文法の基盤を実際の言語使用にあるとする考え方は、認知言語学では用法基盤モデルとして広く知られている (Langacker 1988 等)。主に書き言葉のコーパスに基づいた研究が盛んであるが、話し言葉、特に実際の会話でのやりとりを扱う研究は十分ではない。しかし、会話は人間が言語を獲得する場であるだけでなく、多くの社会的行為がなされる場でもあり、様々な言語使用の中で最も基礎的なものである (Fillmore 1981: 393-394, Langacker 2008: 459)。また、会話の中のやりとりには即時的反応の必要性や話者交替の理解等の独特な認知的制約があり、認知言語学的アプローチからの研究が待たれる分野である。

一方、日常会話をデータとし、会話分析の手法を用いて言語使用を研究する立場は相互行為言語学 (Interactional Linguistics) として近年一潮流をなしつつある (Ochs et al. 1996 等)。本ワークショップの狙いは、相互行為言語学を紹介し、認知言語学にもたらしうる知見を検討することである。会話分析のうち、発話ターンの構築や認識性の問題 (相互行為の現場において誰が何をどのぐらい、どのように知っているかについての問題) 等の言語表現の選択と関わりの深い要素を概観したのち、4件の研究発表により具体例を提示する。

2. 時間稼ぎと態度表明：中国語の談話標識

発表1は中国語の補文構造由来の談話標識“我覺得”のターン中間部における使用をトピックとする。“我覺得”は英語の *I think* に相当し、続く内容が話し手の主観的な意見であるということを表す認知的スタンス標識である。ターン中間部で繰り返し“我覺得”が用いられる場合、話者は自分も含む学校のランクや地域による教育水準の違い等、デリケートな話題に関する意見を述べていることが多い。“我覺得”を使用することで話者はターン構築の最中で時間稼ぎをすると同時に、意見表明に伴う危険を緩和するということを主張する。

3. 漸進的な文の構築：日本語の後置副詞節

発表2では日本語における副詞節の後置構文を取り上げる。日本語の副詞節(「～けど」や「～から」など)は、主節の前に生起するのが文法上規範的とさ

れているが、話し言葉では後置構文、すなわち主節の後に生起するパターンが観察される。後置された副詞節は、主節を産出する中で局所的に生じた相互行為上の課題（例えば、話者が主節の前に有標なポーズと表情を生じたことや、主節の後に相手がターンを取らなかったこと）に対処するために用いられている。これは、話し手は一つの文を最後まで考えてから産出しているのではなく、むしろ時々刻々と展開する相互行為の状況に応じて、漸進的に文を組み立てている（Goodwin 1979）ことを示すものである。

4. 認識性と連鎖環境：日本語の対称詞「あなた」

発表3は対称詞“あなた”を分析対象とする。自然会話にみられる“あなた”は、話者がある判断や評価を下す側に立ち、認識的優位性（Stivers et al. 2012）に志向した発話をする際に使用される。そのため、断定表現を伴う場合が多く、聞き手の面子を脅かす可能性を持つ。日常会話の“あなた”は聞き手を直示する場合より、引用発話内に現れて聞き手以外を指す傾向が強く、指示対象の相手との対比的な関係を浮き彫りにする役割を果たす。本発表は、このような対称詞の使用における話者の認識性と連鎖環境の関係を示し、その相互行為上の役割を明らかにする。

5. 言語行動と非言語行動：日本語の文末表現「でしょう」

発表4は文末表現“でしょう”が単独で用いられるケースに着目する。単独で現れる“でしょう”は、直前の話者が産出した評価表現に寄生させることで、直前の話者への反応を最も早く表明し、強い同意を示すと同時に、話し手の認識的優位性を表明するように産出されている。このような発話の構築は、“でしょう”に伴う指差し等の身体動作やプロソディーに着目することでより明確に理解可能となる。この分析を通じて、通常、個別に研究される傾向のある文法的資源、プロソディー、非言語的資源を組み込んだ包括的な分析的枠組みであるマルチモーダル分析（Streck et al. 2011）の有効性を示す。

6. おわりに

言語分析における相互行為的な観点の必要性は認知言語学者にも意識されている。例えば、クロフトは現状の認知言語学が独我論的であり、あまりに“頭の中”的であるとした上で、認知言語学は“頭の外”に出て、言語の性質についての

社会的・相互行為的な観点を取り入れるべきだと述べている (Croft 2009)。このワークショップでは、4件の事例研究を踏まえて、相互行為言語学のアプローチが今後の認知言語学にもたらす展開や潜在的な問題点について、フロアの参加者とともに議論したい。

参考文献

- Barlow, Michael and Suzanne Kemmer (eds.). 2000. *Usage-based Models of Language*. CSLI Publications.
- Croft, William. 2009. Toward a Social Cognitive Linguistics. In Vyvyan Evans and Stéphanie Pourcel (eds.), *New directions in cognitive linguistics*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 395-420.
- Fillmore, Charles J. 1981. Pragmatics and the Description of Discourse. In Peter Cole (ed.) *Radical Pragmatics*, New York: Academic Press, pp.143-166.
- Ford, Cecilia E., Barbara A. Fox, and Sandra A. Thompson (eds.). 2002. *The Language of Turn and Sequence*. Oxford: Oxford University Press.
- Goodwin, Charles. 1979. The Interactive Construction of a Sentence in Natural Conversation. In George Psathas (ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*. New York: Irvington, pp.97-121.
- Goodwin, Charles (2000). Action and embodiment within situated human interaction. *Journal of Pragmatics*, 32, pp.1489-1522.
- Hakulinen, Auli and Margret Selting (eds). 2005. *Syntax and Lexis in Conversation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 1988. A usage-based model. In Brygida Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in cognitive linguistics*, Amsterdam: John Benjamins, pp.127-161.
- Langacker, Ronald W. 2000. A dynamic usage-based model. In Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-based Models of Language*. CSLI Publications, pp.1-63.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Ochs, Elinor, Emanuel A. Schegloff and Sandra A. Thompson (eds.). 1996. *Interaction and Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Selting, Margret and Elizabeth Couper-Kuhlen (eds.). 2001. *Studies in Interactional Linguistics*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

- Stivers, Tanya, Lorenza Mondada, and Jakob Steensig. 2012. Knowledge, morality and affiliation in social interaction. In Stivers, Tanya, Lorenza Mondada, and Jakob Steensig (eds.), *The Morality of Knowledge in Conversation*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.3-24.
- Streeck, Jürgen, Charles Goodwin and Curtis LeBaron (eds.). 2011. *Embodied interaction: Language and body in the material world*. Cambridge: Cambridge University Press.